

特攻隊員の心情

大野城市 石川 幸三

平成7年も、はや半年が過ぎ去ろうとしている。年賀状を整理していた時、この1年間に学友、戦友ら身近な人たちが7人も亡くなっているのがわかった。次は自分の番でないという保証は何もない。

戦後50年という節目の年を迎え、私たちの少年時代を省みると、軍国少年ともいべき戦争の真最中であつた。学校では「修身」という課目があり、「君に忠義をつくし、親に孝行せよ」と教えられ、愛国心と道徳心を重点的に教育されていた。日華事変が終らないうち、太平洋戦争が勃発した。新聞やラジオは毎日のように大戦果が報道されていた。

私は商業学校在学中、海軍の飛行機乗りになりたいと決意し、昭和18年10月1日、海軍甲種飛行予科練習生第13期として鹿児島海軍航空隊に入隊した。時あたかも南方のガダルカナル、ラバウル方面では航空戦が熾烈化し、一刻も早い航空戦力の増強が要求されていた。

希望に満ちて喜んだのは入隊初日のたった一日だけで、翌日からは本格的軍隊教育が始まった。予科練は飛行兵としての基礎教育機関である。毎日毎晩厳しい訓練に耐えかねて夜の寝台で涙したこともあつたが、後の祭りである。1、2ヶ月もたつと軍隊生活にも馴れ、日一日と体力、気力共に充実してくるのが自分でも感じられた。以後、訓練終了と同時に昭和19年7月、高知航空隊に転隊となった。

ここは偵察術専修航空隊で、従来の訓練とは違って飛行機に乗っての実務訓練である。航法、通信、天測、写真、爆撃、射撃と偵察員必須の教育を受けなければならなかつた。

特に航法は重要だつた。海軍の飛行機は洋上飛行が多く、航法を正確にやらなければ目的地に行くことも帰ることもできない。偵察員も航法だけが頼りになるのである。現在のようなコンピューター操法と違って、実に神経を擦り減らす作業であつた。戦局は刻一刻と悪化している。

昭和20年2月23日飛練教程(飛行練習生)を特別卒業となり、教員予定者として土浦航空隊に転属した。

軍令部では戦勢挽回のため、極秘裏に特攻兵器による特攻作戦を企画していた。この時既に我々のクラスも操・偵別、航空隊別、または配置先によってばらばらに別れていた。

戦雲暗く日は落ちつつあつた昭和19年秋、日本はついに特攻作戦に踏みきつた。航空特攻はもちろん、特攻兵器、即ち「回天」、「震洋」-「桜花」の発動である。人間ロケット、爆弾、炸薬をかかえての必死、体当り戦法であつた。

何が何でも勝たねばならないと、純真な愛国の至情に燃え、嚴重な警戒のもとで特攻要員の選抜が行われた。

「熱望」という形で、同年4月22日付け、長崎県川棚町の特攻訓練所に配置された。第7

回特攻要員である。大村湾は美しい風景が展開していた。もう我々の乗る飛行機はない。

海上特攻兵器「震洋艇」の猛訓練が開始され、訓練を終えた私は同年6月25日、特攻基地である福島県小名浜の第7特攻戦隊第17突撃隊へ進出した。

自動車エンジンを装備したモーターボートの頭部に約300kgの炸薬を積み、速力約30ノットで敵艦に体当たりする戦法である。日本近海を策動する敵機動部隊を迎え撃つべく、本土「決号作戦」であった。

定期的にやってくるグラマン艦載機をひやかし半分兵舎の窓から眺めている時、機銃掃射の一弾が私の横をかすめ、兵舎の畳と床の間にとどまっていたこともあったが、死に対する恐怖心はなかった。またある時は、訓練の合い間に岸壁に出て魚釣りをしたり、特配の酒を皆で飲んだり、『何時でも死ぬぞ』という悟りの心境であったかもしれない。

近くの岩手県釜石が2回も米軍の艦砲射撃を受けた。敵軍上陸の前兆である。出撃の日は近い。

昭和20年8月上旬、最後は、さっぱりと華やかに征きたい。身の回りを整理し、遺書を書く準備もした。戦友の顔も何時もと違い緊張気味だ。広島、長崎に原爆投下。

『8月15日 戦争は終わった』

死の寸前を体験し、今現在生きている。阪神大震災やオウム事件は別として、戦後の日本は豊かになり何不自由ない平和が長く続いている。『これでいいのか』と自分を疑いたくなる。

あの時の戦争で民間人、軍人合わせて300万人以上の人達が死んでいる。我々の同期生だけでも1000人以上が戦死している。みんな国を守るため、家族を愛するため死んで征った。

私も後10日、否1週間もたなかったかもしれない。間もなく死を迎える人間としての悲壮な気持は、いかに純真な愛国の至情といえども人間には変わりはない。原爆投下は私の命を永らえさせてくれたと自認している。原爆は人の生死を分けた複雑な気持だ。

私たちが通信手段として使用した無線通信、即ち、モールス符号、・-「イ」、・-・-「ロ」、-・-・「ハ」、-・-・「ニ」、-・-・「ホ」、・「ヘ」、・-・-・「ト」は、短符「・」長符「-」で構成されていた。これも戦争末期には「決別」を伝える信号になるとは知らなかった。後日、我々特攻隊員の決別の叫びでもあった。

突入寸前に電鍵の調節ネジを締めれば電流接続となり、「- - - - -」長符連送。

基地の電信員は涙をこらえてこれを受信したという。多くの戦友たちが死んで征った最後の光景が目に焼きついて離れない。

残る桜 急ぐが如く 散り始む